

まえばし 地下 マップ 上川淵地区

前橋市教育委員会事務局 文化財保護課
Tel.027-280-6511 令和4年2月発行

朝倉・広瀬古墳群

前方後方墳としては全国で4番目の大きさである八幡山古墳(はちまんやまこふん)や、ヤマト王権とのつながりの証である三角縁神獸鏡(さんかくぶちしんじゅうきょう)が出土した、東日本最古級の前方後円墳、前橋天神山古墳に代表される朝倉・広瀬古墳群は、かつて150基以上もの古墳がありました。残念なことに、住宅団地造成などにより、その多くが姿を消しました。右の写真は、山王金冠塚古墳(さんのうきんかんづかこふん)から出土した副葬品です。金銅製の冠は、新羅(しらぎ)式冠で、朝鮮半島の文化の影響が見られます。本古墳は、八幡山古墳、前橋天神山古墳に続き、本地域を支配した有力者の古墳と考えられます。



金銅製冠(左)・衝角付背(右上)・大帯(右下)
(東京国立博物館提供)

古墳群を造った人々

櫛島川端(めてじまかわばた)遺跡では、3世紀後半に噴火した浅間山の降下物に覆われた水田跡が見つかりました。これは、八幡山古墳、前橋天神山古墳の築造時期に先駆けており、水田耕作を経済基盤として、古墳が造られたと考えられます。水源に乏しかった本地域において、水田経営を可能にしたのは、広瀬川低地帯を流れていた古利根川から前橋台地上に引水する技術でした。ちなみに、5世紀末の渋川市の金井東裏(かないひがしうら)遺跡の「甲(よろい)を着た古墳人」は、九州大学の人骨分析によると、渡来人的な顔立ちをしていたようです。これは、近畿・北部九州の古墳人に見られる特徴だといえます。すでにこの時期から、ヤマト王権の進出があったものと考えられます。



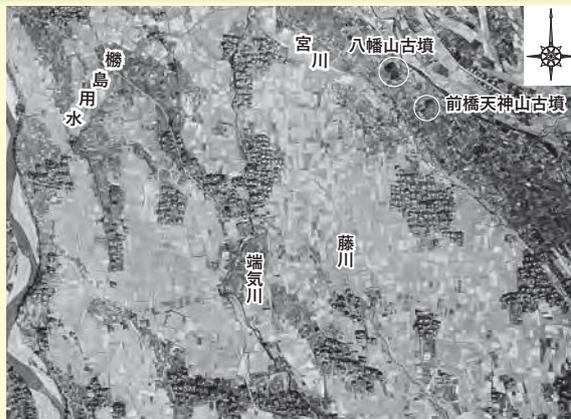
竪穴住居(左)・高床式倉庫(右)の模型
(国立歴史民俗博物館蔵)



甲を着た古墳人と首飾りの古墳人復顔像
(群馬県立歴史博物館提供)

条里地割

古墳時代は、地形を利用した水田経営が営まれていましたが、奈良・平安時代になると、「都市計画」的な開発が行われました。前橋台地上は約109m四方の正方形を基本単位とする条里地割に基づき、大規模な水田開発が行われています。これに伴い、古利根川の水を引き入れ、前橋台地上に行き渡らせる用水路網が整備されたと考えられます。宮川・櫛島用水・端気川・藤川などが、用水路として想定されます。



昭和22年の上川淵地区

(国土地理院 米軍空中写真 USA-R408-No.79・80を合成)

古代から続く「朝倉」

下の写真は、元総社蒼海(もとそうじゃおうみ)遺跡群(116)の平安時代の井戸跡から見つかった瓦です。「(那)波郡朝倉」と墨書されています。大化元年(645)以降、徐々に律令体制が整えられ、全国は60余りの国に分けられました。現在の群馬県とほぼ同じ範囲の上野国(こうずけのくに)は、14の郡を管轄しており、上川淵地区は、那波郡(なわくん)と群馬郡に含まれます。墨書瓦は元々は上野国分寺に使われていたものと思われ、瓦に地名を記したのは、「朝倉」郷が瓦製作に関与したか、献納したことを表すためと考えられます。また、養老4年(720)成立の日本書紀には、大化元年に朝廷が派遣した東国等国司に、本地域の有力者、朝倉君(あさくらのきみ)が対応したことが分かる記事があります。「朝倉」は、古代から続く地名だったのです。

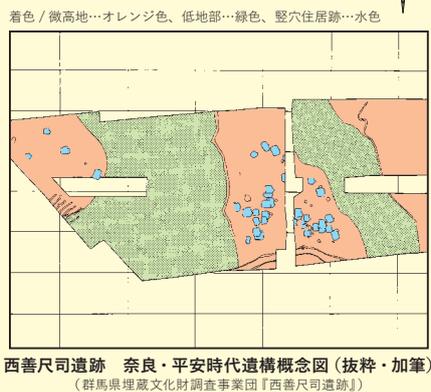


「(那)波郡朝倉」と墨書された平瓦
(元総社蒼海遺跡群(116)1号井戸跡から出土)

約2万4千年前	浅間山が山体崩壊し、前橋泥流が発生する。
約1万6千年前	前橋台地が安定化したと想定される。
3世紀後半	浅間山が噴火する。(浅間C軽石が降下)
4世紀	県内最古とされる前方後方墳の八幡山古墳や前方後円墳の前橋天神山古墳が相次いで造られる。
6世紀	榛名山二ツ岳が2度噴火する。
大化元年(645)	大化の改新が始まる。各国に国司・郡司が置かれる。
大宝元年(701)	大宝律令が制定され、国・郡・里制が施行される。
和銅3年(710)	平城京遷都。
和銅6年(713)	上毛野国を上野国と改める。この頃、国府が成立する。
養老4年(720)	舎人親王(とねりしんのう)ら「日本書紀」をつくる。
延暦13年(794)	平安京遷都。
天仁元年(1108)	浅間山が噴火する。(浅間B軽石が降下)
文治元年(1108)	源頼朝が守護・地頭の設置を認められる。
文永11年(1185)	モンゴルが襲来する(文永の役)。
弘安4年(1274)	再度モンゴルが襲来する(弘安の役)。
弘安8年(1285)	霜月騒動。安達泰盛が一族と供に滅ぼされる。
暦応元年(1338)	足利尊氏氏が征夷大將軍になる。
永享12年(1440)	結城合戦。上州白旗一揆に長野周防守・長野宮内少輔・長野左馬助が名を連ね、戦功をあげる。
享徳3年(1454)	足利成氏、関東管領上杉憲忠(のりただ)を謀殺し、享徳の乱が始まる。
応仁元年(1467)	京都で応仁の乱が起こる。
文明8年(1476)	長尾景春、上杉氏に背き、武蔵五十子陣(いかづつのじん)を攻める。
大永7年(1527)	長野左衛門大夫・同宮内大輔らが、惣社蒼海城(おうみじょう)を攻める。
天文10年(1541)	那波宗俊(むねとし)、厩橋長野賢忠(けんちゅう)ら、横瀬泰繁(やすしげ)を金山城に攻める。

古代の大規模集落

8世紀になると、律令制が導入され、前橋市元総社町付近には、上野国府(こうずけこくふ)・国分僧寺・国分尼寺が造営されました。前橋台地上では、微高地に集落、低地を耕作地帯にする「都市計画」的な開発が始まりました。右の図は、西善尺司(にしぜんしゃくじ)遺跡の奈良・平安時代の遺構分布図です。古墳時代には方形周溝墓がひしめきあった微高地には集落が展開し、低地では古墳時代から継続して水田耕作が行われています。この地域は、居住環境が良好な場所であったと思われる、西善尺司遺跡、中内村前遺跡、前田遺跡では合わせて300軒近い住居跡が見つっています。



上野国守護安達氏

源平合戦終盤の頃、朝廷から源頼朝に東国の支配権を認める、宣旨(せんじ)が下されました。頼朝の伊豆流人時代からの側近、安達盛長(あだちもりなが)が上野国奉行人(守護の地位)となり、子孫も代々、上野国の守護に任じられました。玉村町角淵には「安達屋敷」の伝承地もあり、同地の武士、玉村氏は安達氏の被官となっています。鎌倉幕府第8代執権、北条時宗(ほうじょうときむね)を外戚として支えた安達泰盛(やすもり)は、元寇の際、御恩奉行を務めました。令和3年に国宝に指定されることになった『蒙古襲来絵詞(もうこうしゅうらいえことば)』(宮内庁保管)には、肥後国の御家人、竹崎季長(たけざきすえなが)の蒙古合戦での先駆けの功の訴えを聞く姿が描かれています。時宗の死後、泰盛は、北条得宗家(とくそうけ)の執事、平頼綱(たいらのよりつな)との対立により、霜月騒動(しもつきそうどう)で、一族と共に滅ぼされ、以後、北条得宗家が上野国守護となります。



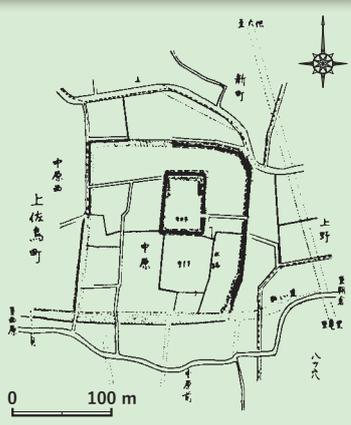
泰盛(左)に蒙古合戦の戦功を訴える季長(中央)
(『蒙古襲来絵詞』(模本)、九大コレクション)

環濠屋敷

前橋台地には、環濠屋敷(かんごうやしき)と呼ばれる、四辺を堀で囲んだ中世屋敷が集中的に分布していました。『群馬県の中世城館跡』の調査委員、山崎一氏により、多くの縄張り図が作られ、周知されています。環濠屋敷の堀には、水を引き込むための灌漑(かんがい)機能と敵や洪水に対する防衛機能の2つの働きがありました。堀の方向は、古代の条里地割の影響を受けていると考えられます。前橋長瀬線バイパスや北関東自動車道の道路工事に先立つ発掘調査では、今まで存在を知られていなかった屋敷跡が見つっています。



堀で囲んだ武士の館(模型)
(国立歴史民俗博物館所蔵)



中沢屋敷 条里制に深い関わりがある。
(群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』)

上州白旗一揆

鎌倉時代に北条氏の守護領国であった西関東には、守護クラスの大名が存在せず、中小の領主が割拠していました。これらの領主達は一揆を結び、連合体として結城合戦や享徳の乱など様々な合戦に参陣しました。上野の一揆は上州白旗一揆(しらはたいっき)と呼ばれています。文明8年(1476)、長尾景春(ながおかげはる)が主の関東管領上杉顕定(あきさだ)に反旗を翻すと、中一揆(上野中央部の一揆)旗頭(はたがしら)の長野為業(ためなり)は、景春方として活躍しました。この為業を厩橋長野氏の初代とする説もあります。

厩橋長野氏と那波氏

戦国期、上川淵地区は厩橋長野氏と那波氏の支配下にあったと推定されます。厩橋長野氏は箕輪長野氏と同族で、厩橋城を築きました。西善町の祝昌寺は、厩橋長野氏の建立とされています。那波氏は、源頼朝の側近、大江広元の子孫にあたります。当時の資料には「那波ノ郡主」と見られます。両氏は、関東管領山内上杉氏の被官でしたが、後北条氏の上野進出に伴い山内上杉氏が没落すると、後北条氏に従いました。永禄3年(1560)、越後長尾景虎は上野に侵攻すると、親北条派である那波氏の居城、赤石城(伊勢崎市)を攻めました。その際、厩橋長野氏は景虎の旗下に属していましたが、陣中で起きた暴れ馬を謀反と誤解され、誅殺されます。那波氏は嫡子(たかひこ)を人質に出し降伏し、那波領は戦功のあった新田金山の横瀬氏に与えられ、厩橋城には越後北条氏(きたじょうし)が置かれました。



「弾正少弼上杉謙信入道輝虎」
(国立国会図書館デジタルコレクション)

天正21年 (1552)	北条氏康、武蔵御嶽城(みたけじょう)を攻め落とす。平井城に迫ると、関東管領上杉憲政(のりまさ)と、平井城を出て、上野国内を流浪する。
天文23年 (1554)	後北条氏、勢内村(東善町)について、長尾・那波氏の所領争いの裁決を下す。
永禄3年 (1560)	長尾景虎と上杉憲政が越後勢を率いて関東進出。那波宗俊が赤石城を攻められ、降伏する。
永禄5年 (1562)	北条氏康が武田信玄の上野侵攻に同調し、厩橋城を攻撃する。この年、越後北条高広、厩橋城に入る。
天正6年 (1578)	上杉謙信が死去。その後、後継者争い「御館の乱」が起こり、後北条氏による上野支配が進む。
天正10年 (1582)	滝川一益(かずます)が厩橋城に入城するが、本能寺の変で織田信長が倒れ、帰国する。越後北条高広は、後北条氏の沼田城攻略への参陣を拒否する。
天正11年 (1583)	北条氏政が厩橋領に侵攻する。善養寺に陣を敷く。※西善町の須田屋敷に北条氏邦(うじくに)の陣屋伝承あり。
天正18年 (1590)	豊臣秀吉が全国を統一する。徳川家康が関東入りし、譜代の平岩親吉(ちかよし)を厩橋城に人封させる。
寛長6年 (1601)	平岩親吉が甲斐に移り、代わって川越から酒井重忠(しげただ)が厩橋城に入る。
寛永14年 (1637)	酒井忠清(ただきよ)が藩主となる。この頃「厩橋を「前橋」と呼ぶようになる。
寛保2年 (1742)	利根川大洪水。
寛延2年 (1749)	藩主酒井忠恭(ただたすみ)が姫路に転封となり、代わって姫路の松平朝矩(ともりのり)が人封する。
明和4年 (1767)	前橋城下で大火。藩主松平朝矩が川越に移城する。前橋は川越藩の分領となる。
天明3年 (1783)	浅間山大噴火、各地に甚大な被害を及ぼす。
文政4年 (1821)	前橋藩善養寺領の農民、年貢軽減の訴訟を起こす。
安政6年 (1859)	横浜開港に伴い、前橋の生糸が活況を呈する。
文久3年 (1863)	前橋町人有志から一万両近い献金。前橋城再築が正式に許可される。
慶応3年 (1867)	前橋城が完成する。大政奉還。
昭和43年 (1968)	群馬大学などにより前橋天神山古墳の発掘調査が行われ、三角縁神獣鏡など前期古墳を代表する副葬品が出土する。